

## 養蚕による繁栄

江戸時代（1603-1867年）以降、白川郷の人々は、主に養蚕と塩硝の生産で通貨を獲得していました。特に幕末から明治末期（1868-1912年）にかけて、日本が生糸の一大輸出国となり、需要が急増したことから、養蚕は地域の重要な産業となりました。1870年の記録によると、現在の白川村に相当する集落では、飛騨地方で最も多い、1世帯あたり年間平均65kgの絹が生産されていました。白河でも有数の生産量を誇っていた遠山家では、最盛期には、春期だけで375kgもの生糸を生産していました。